

建通新聞

令和5年10月5日（木曜日）

いわき市の洪水調節池

顕著な被害軽減効果

福島県と茨城県を襲った9月の豪雨災害では、洪水調節池などによる被害軽減効果が顕著に見られた。足立敏之参院議員が現地視察を終え、「河道掘削など従来の対策に加え、洪水貯留施設など、流域治水の考え方に基づいた対策を講じていく必要がある」と感想を語った。福島県いわき市では洪水調節池が被害軽減効果を発揮した。

＝ 足立議員が現地視察 ＝

いわき市では、時間雨量100mmの降雨により、宮川や新川といった中小河川が氾濫し、1300戸余りの住宅床上浸水の被害が発生した。一方、市内を流れる県管理の湯本川では、あらかじめ沿川に調節池を整備していたため、豪雨で増水した湯本川の水が越流堤から調節池に流れ込み、下流側の被害を軽減した効果が見られたという。

「通常時の調節池、写真（上）越流時の状況。足立議員は、7月中旬の秋田の水害と同様に、市街地を流れる中小河川の浸水対策が喫緊の課題となっている」とした。その上で、いわき市の調節池や茨城県の洪水調節用ダムのある地域で、一定の被害軽減効果が見られたことを踏まえ、「流域内のダムや遊水池・調節池をはじめ、校庭貯留や地下調整池といった洪水貯留施設を検討する必要がある」との考えを改めて示した。

また、いわき市内では、国宝「白水阿弥陀堂」の近くを流れる新川も氾濫し、お堂が床上20cmほど浸水しており、「文化財などが被害を受けた場合、復旧をできるだけ公的な資金で支えるようなシステムが必要」ともした。

茨城県日立市では、県道などの土砂災害現場、高萩市では河岸浸食や浸水被害があった河川などを、国や県の職員、地元建設業協会の会員らと見て回った。

日立市の土砂災害現場については、「市の東西を結ぶ重要な県道が寸断され、市民生活に大きな影響が出ている」と振り返った上で、「法面が崩れにくい道路構造に転換するなど、道路ネットワークの強靱（きょうじん）化が急がれる」と語った。

湯本川調節池

